

『斐太後風土記』による近代飛驒地方の作物結合の復元

松 山 利 夫

一 はじめに

近年における山村研究には、一つの注目すべき動向が認められる。それは、山村の文化的伝統の再構成を試み、かつその系譜を平地の水田稲作農村とはやや異質なものとして再評価しようとする動きである。たとえば、千葉徳爾氏がきわめてユニークな視点から山村文化の系譜に論及する「山中異界論」は、そうした動向の代表的な主張である(1)。

千葉氏とはやや視点が異なるが、筆者も近・現代の山村に、平地稲作農村とは違った文化的伝統の存在を認める立場をとる。筆者がここでいう文化的伝統とは、山村に特徴的な生活様式を意味する。しかも、この生活様式ともっとも深くかかわる部分、すなわち山村の文化的伝統のもっとも核心的部分は、J・スチュワードの指摘するように(2)、サブシステンス・エコノミーに求められる。

近代以後における山村のサブシステンス・エコノミーは基本的には農耕であり、採集・狩猟および漁撈は農耕の補完的な機能をもっていたにすぎないと考えられる。この点に関して、筆者はかつて近代の飛驒地方を事例に、一般的

に考へ得る四つのサブシステム・エコノミー——農耕・採集・狩猟・漁撈——のいずれによって、当時の人口が支持されていたかの分析を試みたことがある(3)。その結果、近代の飛騨地方では、総人口九二六〇〇人の約六〇％はコメとヒエで代表される穀類と大豆とで説明できる。残る二〇％程度の人口は、クリやドングリ類などの堅果類をはじめ、クズやワラビなどの採集によって獲得される食糧資源によって説明が可能であり、狩猟および漁撈に依存する割合は総人口の一％にも満たない。残余の二割弱を占める人口の説明は、コメとヒエを主とする移入穀物に求めざるを得なかつた。このような試みの結果、近代飛騨地方のサブシステム・エコノミーは、水田稲作と雑穀栽培をともなう農耕が基本であり、これに野生食用植物の採集が付随するものであることが判明した。

そこでつぎの段階として、これら農耕と採集の実態が明らかにされねばならない。このうち採集についてはすでに分析を加えたので(4)、本報告においては、近代飛騨地方の作物結合の実態を復元する。さらに、復元されたいくつかの作物結合について、分布上の特色とその意味とを合せて考察し、当時の農耕の特性を明らかにしたい。

二 資料の性格とその処理方法

資料には、富田礼彦編『斐太後風土記』(一八七三年)の刊本全二巻を用いる(5)。

(一) 資料の性格

『斐太後風土記』(以下では『後風土記』と略称する)には、当時の大野・古城・益田三郡をあわせた四一五村のすべてについて、石高、戸数と人口、各種の産物、寺社領除地の有無など、非常にくわしい記録がある。なかでも「産物」の項はとりわけ詳細をきわめ、堅果類などの野生食用植物や狩猟対象動物の種類、さらには魚類や各種の鉱工業製品

などが一村ごとに記録されている。筆者がこの報告で分析を加えようとする農作物に限っていえば、当時の栽培作物が穀類から豆類・イモ類・蔬菜類・工芸作物にいたるまで網羅され、しかもそのうちの一部の作物には収量さえも明らかになっている。

これに類似した内容をもち、かつ飛驒地方の実情を記録した近代の資料には、明治一〇年（一八七七）前後の町村誌があるが、現状では入手が困難である。したがって、近代飛驒地方の作物結合を復元しようとするこの報告にとつて、『後風土記』はたいへん貴重な資料となる。

しかし、この種の二次資料を用いる分析では、記録の信ぴょう性を検討する必要がある。

『後風土記』に関しては、(一)これが実態調査にもとづく記録であり、(二)その記載内容がきわめて正確なことがすでに明らかになっている。

(一)について、桑谷によると(6)、『後風土記』の成立の発端は、明治二年（一八六九）二月から翌三年六月ごろにかけて実施された飛驒地方の全村の調査に求められる。この調査は、当時の高山県知事宮原大輔の命により、全村の村三役を対象に一〇項目からなる廻状を用いておこなわれた。しかも廻状にもられた項目のそれぞれには、おのおの村で調査すべき要点が簡潔に書きそえられており、資料の精度をできるだけ統一しようとする意図がうかがわれる。

この調査の結果はいったん『風土書上帳』にまとめられ、これに富田自身の調査結果と考察とを加えて、明治六年（一八七三）に『後風土記』が編さんされている。こうした編さんの経緯に明らかかなように、『後風土記』は比較的短い期間ではあったにしろ実状調査をおこない、その成果を記録したものである。

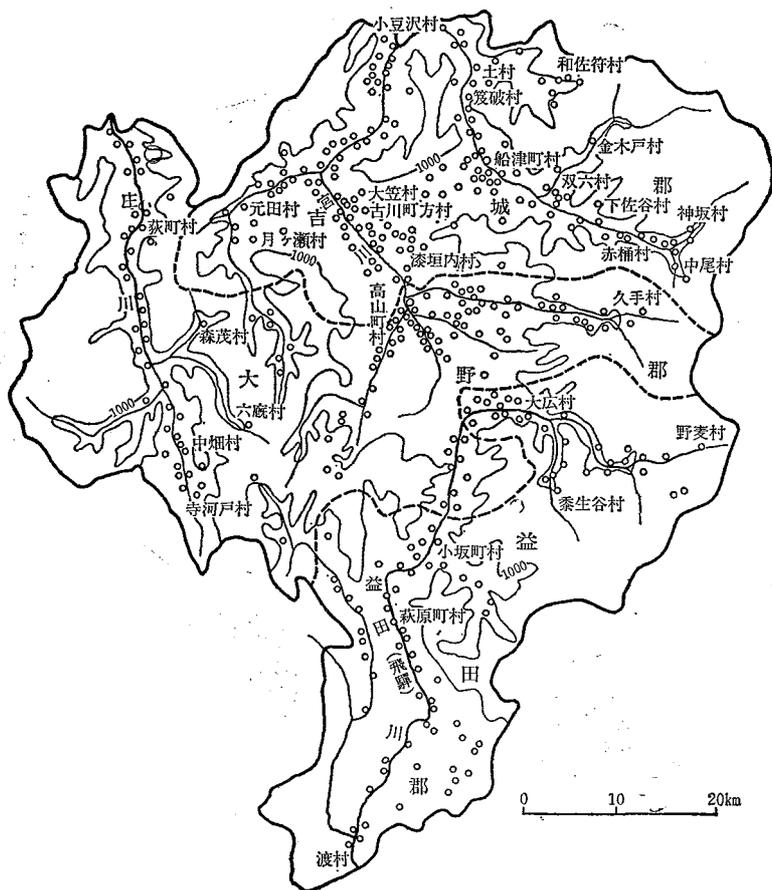
したがって、(一)その記載は正確である。たとえば、『後風土記』に記載のあるサケ・アユ・ウグイ・イワナなどから復元される当時の飛騨地方の淡水魚類の垂直分布域は、魚類生態学の分野でいうイワナ域、ヤマメ域、ウグイ域、オイカワ域、コイ域といった分類にみごとに対応するのである⁽⁷⁾。あるいは、クリ・ナラノミ・トチノミといった三種類の堅果類の採集村の分布は、今日知られるところの植生帯に一致する⁽⁸⁾。

これらの事実から、『後風土記』の記載は分析に十分耐え得るものと判断される。

(二) 資料の処理方法

「産物」の項に記録された当時の農作物は、後述のように五五作物にも達する。そのおのおのを四一五村すべてにわたって検討するには、資料の数がきわめて多い。そのためここでの分析には、国立民族学博物館のコンピュータ部門が作製した「ヒタゴフドキデータベース」を活用し、農作物のおおのについて栽培村数の集計をおこない主作物を判定するなど、資料の基礎的な処理をおこなった。そのうえで、最終的には四一五村のうちの三〇%にあたる一二五村を単純ランダムサンプリング法によって抽出し、それぞれの村ごとに栽培作物の組合せを求め、作物結合の実態を復元する。

もとより、作物結合の定量的な分析にはウィーバー、J・C、の手法がある⁽⁹⁾が、『後風土記』では各作物の作付面積が明らかでない。そのためこの方法は採用せず、つぎのように資料を処理した。まず、作物ごとの栽培村数を集計することによって主作物と判定したものを、穀類・豆類・蔬菜類・工芸作物の四つにグループ化する。ついで、これを三〇%のサンプル村ごとに *by-nominal* に測定し、作物結合の実態と当時の農耕の特性を明らかにする。この方法は、定量的な処理としてはもっとも単純であるにもかかわらずいかなる代表値をもとらない。その有効性は、キ



第1図 明治3年の村落分布

ング⑩が指摘し、ヘンシヤルらが実証している⑪のように、作付面積などが不明な場合における作物結合とその特性とを定量的に把握し得ることにある。

なお、分析の基本となる『後風土記』に記載のある四一五村すべてを国土地理院発行五万分の一地形図に記入して作製した(第一図)。

そのうち、町村合併やダムによる水没などのために『後風土記』と現在の集落との同定が困難なものについては、隣接村への方位や

第1表 栽培作物の種類とその比較

区 分	斐太後風土記の作物	種類数	*長野県町村誌の作物	種類数
穀 類	コメ, ヒエ, アワ, ソバ キビ, コキビ, オオムギ コムギ, トウモロコシ シコクビエ	9	コメ, ヒエ, アワ, ソバ キビ, モロコシ, オオ ムギ, コムギ, トウモ ロコシ, シコクビエ	10
豆 類	ダイズ, アズキ, ササゲ エンドウ	4	ダイズ, アズキ, エンド ウ, ササゲ, インゲンマメ	5
蔬菜類	葉菜	カラシナ, ネギ, ズイキ 莖立菜, 菜類	カラシナ, ネギ, トウナ トウガラシ, 菜類	5
	果菜	キウリ, ナス, カボチャ ウリ, スイカ, 夕顔	キウリ, ナス, カボチャ, シロウリ, 冬瓜, 甜瓜, 夕顔	7
	根菜	カブラ, ダイコン, ニン ジン, ゴボウ	カブラ, ダイコン, ニン ジン, ゴボウ	4
イモ類	ジャガイモ, サトイモ, ヤマノイモ, サツマイモ コムニャク, ツクネイ モ類	7	ジャガイモ, サトイモ, サツマイモ, ヤマノイモ	4
工芸作物	ナタネ, タバコ, 楮, 桑 茶, 荏, アサ, ゴマ, イ, 仏供花	10	ナタネ, タバコ, 楮, 桑 麻, 荏, ゴマ, アイ, タ	9
計		55	計	44

*長野県町村誌の作物は、上水内・下水内両郡124村のみの集計を示す。

距離に関する記載から一応の推定をしたらう
えで、現地調査をおこなって確かめる方法
をとった。

三、明治三年飛騨地方の主要作物

『後風土記』に記録のある食用産物（附
表）のうち、フキ、タケノコ、ユリ、ワサ
ビなど採集によるものを除くと、確実な栽
培作物は第一表のとおりで、当時すでに蔬
菜類をふくめた各種の作物が認められ、そ
の数は五五種類にも達している。この五五
種類という飛騨地方の栽培作物数は、他地
域の山村にくらべて著しく多いのかどうか
についてはよくわかっていない。そのおも
な理由は、栽培作物を網羅するこの種の同
時代の記録が他に求めにくいことによる。

手元にある明治一五年（一八八二）ごろ

第2表 栽培村落数による穀類・豆類の作付順位

順位	大 野		吉 城		益 田		全 郡	
	作物	作付村数	作物	作付村数	作物	作付村数	作物	作付村数
1	稗	131	稗	173	稗	99	稗	403
2	大豆	130	大豆	168	大豆	99	大豆	397
3	大麦	117	米	158	大麦	80	大麦	346
4	米	106	小麦	152	小麦	80	米	343
5	小豆	103	大麦	149	米	79	小麦	329
6	小麦	97	小豆	138	ソバ	35	ソバ	258
7	粟	89	ソバ	137	小豆	13	小豆	254
8	ソバ	86	粟	134	粟	4	粟	227
9	ササゲ	30	キビ	47	—	—	キビ	77
10	キビ	22	ササゲ	6	—	—	ササゲ	36
11	エンドウ	4	—	—	—	—	エンドウ	4
12	トウモロコシ	1	—	—	—	—	トウモロコシ	1
全村落	137		178		100		415	

の『長野県町村誌』(12)のうち、現在の長野市域をふくむ上水内・下水内両郡一二四村の例では、穀類・豆類はもちろん、イモ類や蔬菜類、工芸作物にわたって四四種類が記録されている(第一表)。これを飛驒地方と比較すると、両者の間には作物の種類数にほとんど差がないばかりでなく、三六種類の作物が両地域に共通する。これは、飛驒地方の栽培作物の種類が特殊なものではないことを示すとともに、近代の山村においては主食糧にはなり得ない作物の栽培がすでに展開していたことをも示すものである。

(一) 穀類と豆類

飛驒地方における五五種類の作物のうち、栽培村数(13)が相対的に多い穀類と豆類の一二作物について、主作物を判定するために各作物の栽培村数を集計すると、第二表が得られる。こ

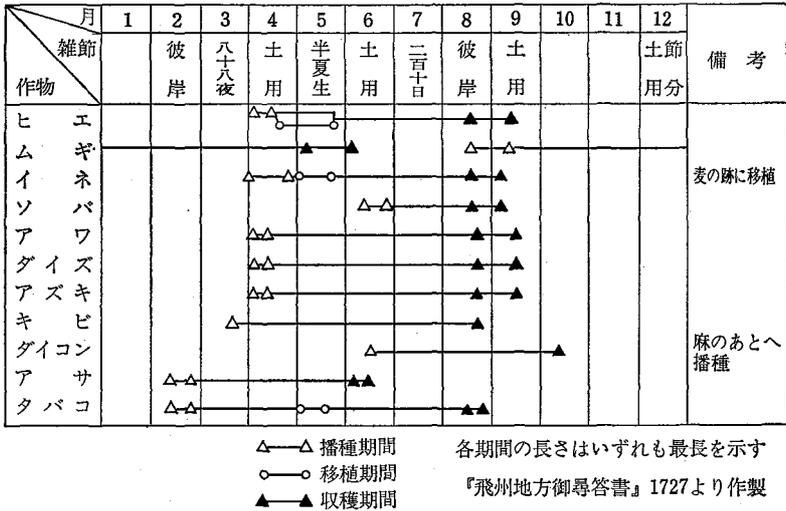
第3表 穀類・豆類の1村落当たり平均収量

順位	大野		吉城		益田	
	作物	平均収量/村	作物	平均収量/村	作物	平均収量/村
1	米	213.2石	米	102.7石	米	117.6石
2	稗	94.7	稗	57.9	大麦	85.6
3	大豆	19.9	大麦	12.7	稗	74.8
4	大豆	18.0	大豆	11.6	大豆	10.7
5	小麦	8.4	小麦	8.3	小麦	8.2
6	ソバ	8.2	粟	6.6	ソバ	5.9
7	粟	7.4	ソバ	5.5	小豆	1.1
8	小豆	2.4	小豆	2.6	粟	0.6

れによると、大野・吉城両郡では第八位と九位の作物の栽培村数に著しい差が認められ、益田郡ではこれが第五位と六位の間にあらわれる。したがって、大野・吉城両郡ではヒエ以下第八位までが、同様に益田郡では上位五作物が、ともに当時の主作物と判定できる。そのなかでも、ヒエ・ダイズ・オオムギといった作物が三郡いずれも上位を占め、これらについてコメないしコムギが位置する。

このようにして、栽培村数から主作物と判定されたヒエ以下の八作物について、一村当たりの平均収量を算出すると、第三表が得られる。これによれば三郡ともにコメの収量が圧倒的に高く、ついでヒエ、ダイズもしくはムギ類が続くが、ヒエとダイズ（大野・益田両郡）またはヒエとオオムギ（吉城郡）の間には収量の差が大きい。このことから、大野・吉城両郡ではコメとヒエを基幹作物とし、益田郡ではこれにオオムギが加わる。いずれも水田稲作を基礎とするコメと、常畑作物の性格の強いオオムギ、それにより焼畑作物的なヒエとから当時の基幹作物が構成され、ダイズ・コムギ・アワ・ソバはこれらの補完物的な機能をもったものと推定される。

なお、基幹作物と判定される作物の栽培期間の概要は、『飛州地方御尋答書』(1)によると第二図のようになり、この当時高山町村周辺では、イネの裏



第2図 主要作物カレンダー

作にムギ類が栽培されていたようである。

(二) 工芸作物

工芸作物に関する『後風土記』の記載は収量の単位が不統一なばかりでなく、収量の記録がないものをもふくんでいる。こうした事情は後述のイモ類や蔬菜類にも共通するため、以下では作物別の栽培村数と一村当たりの栽培作物数とによって分析を加えることにする。

工芸作物の一村当たり栽培作物数を集計した第四表には、大野・吉城両郡と益田郡との間に顕著な差がみられる。つまり、大野・吉城両郡では栽培作物数三〜五にモードがあらわれるのに対し、益田郡では二作物以下が圧倒的に多くなる。これを作物の種類別にみると(第五表)、まず益田郡の場合、栽培作物が楮・茶・荏に限定されている。注目すべきはこれら三つの作物がいずれも焼畑での栽培を主とする作物である点で、ナタネやアサ、アイやタバコといった常畑での栽培を主体とする相対的に新しい工芸作物の展開をまったくみていないことである。したがって、工芸作物に関するかぎり、益

第4表 工芸作物1村当たり作物数

作物数	村落数			
	大野	吉城	益田	全郡
0	5(0.0)	4(0.0)	32(0.3)	41(0.1)
1~2	23(0.2)	17(0.1)	69(0.7)	109(0.3)
3~5	88(0.6)	97(0.5)	—	185(0.4)
6~8	20(0.1)	60(0.3)	—	80(0.2)
9≤	1(0.0)	—	—	1(0.0)
計	137	178	100	415

作物種類数10 (0.6)は村落数に占める割合

第5表 工芸作物の栽培村落数

	大野	吉城	益田	全郡
ナタネ	49	128	—	177(42.7)%
荏	99	148	7	254(61.2)
ゴマ	5	33	—	38(9.2)
桑	118	137	—	256(61.7)
麻	83	114	—	197(47.5)
楮	85	139	59	283(68.2)
アイ	21	44	—	65(15.7)
タバコ	46	57	—	103(24.8)
茶	10	1	17	28(6.7)
仏供花	5	—	—	5(1.2)

田那は焼畑的性格をより色濃く残している地域と結論できる。

益田郡ほどには顕著でないにしても、こうした性格は大野・吉城両郡にも認め得る。すなわち、この二郡においても荏・桑・楮が上位を占め、その栽培村数は三作物あわせて大野郡で六二%強に、同じく吉城郡でも約七七%にも達しており、焼畑型の工芸作物が重要な地位にある。これらについて、新しい油脂作物であるナタネと、

古くから布の原料であったアサの栽培村が多い。ナタネとアサにつぐ常畑の工芸作物にタバコとアイがあるが、この二作物の栽培村数は相対的に少ない。その理由はおもに、タバコとアイの栽培にあたっては耕地の選択が厳しく、かつ肥培管理に多くの労働力の投下が必要なことに求められるであろう。

こうした栽培村数の処理の結果、近代の大野・吉城両郡における工芸作物は、荏などの焼畑作物を中心に、ナタネなど常畑作物を加えて構成されていたことが明らかになる。このような作物構成の特色は、基本的には焼畑の系譜に

第6表 蔬菜類 1村当たり作物数

作物数	村落数				全郡
	大野	吉城	益田	全郡	
0	79	173	83	335	
1~2	20	4	17	41	
3~5	20	1	—	21	
6~8	18	—	—	18	
9≤	—	—	—	—	
計	137	178	100	415	

作物種類数15

第7表 イモ類 1村当たり作物数

作物数	村落数				全郡
	大野	吉城	益田	全郡	
0	90	152	95	337	
1~2	47	25	5	77	
3~5	—	1	—	1	
6≤	—	—	—	—	
計	137	178	100	415	

作物種類数 7

すべてが、主食糧源としての穀類と豆類、および商品作物である工芸作物の栽培に提供されていたと解される。

この解釈に基本的なあやまりがないとすれば、蔬菜類はリョウブやゼンマイなどの、イモ類はクズなどの野生植物（附表）に依存していた可能性が高い。別のいかたをすれば、飛驒地方においては蔬菜類やイモ類が、焼畑の系譜に於ける当時の農耕の構成要素として、十分に機能していなかったと考えられる。

ただし、大野郡には少数ではあるが蔬

つらなるものである一方、相対的に新しい常畑作物の展開の傾向をも示すものである。

(三) 蔬菜類とイモ類

『後風土記』に記載のある作物のうち、蔬菜類五種とイモ類七種の栽培村はきわめて少ない。第六表と第七表とそれぞれに作物類の一村当たり栽培作物数を集計したものであり、蔬菜類・イモ類をとくに栽培しない例が全村五の八〇%以上にも達する。したがって、当時の飛驒地方にあっては、水田での稲作をふくめて耕地のほとんど

第8表 大野郡における蔬菜類の栽培村落

作物	葉 菜			果 菜					根 菜		
	ネギ	莖立菜	カラシナ	ウリ	ナス	キュウリ	スイカ	カボチャ	カブラ	大根	ゴボウ
村落数	12	3	1	12	31	17	1	35	56	41	30

菜の栽培村が偏在する。その理由はあとでくわしく論ずることにして、まず蔬菜の種類をみると(第八表)、カブラと大根の栽培村が相対的に多く、ついでカボチャ、ナス、ゴボウ、キュウリの順となる。当時は焼畑でも栽培され得た根菜の地位が高く、これに對して葉菜の栽培村は非常に少なかった。これはさきに述べたように、近代における農耕の構成要素として十分な役割をになつていなかった蔬菜類のなかでも、とりわけ葉菜においてそれが顕著なことをうかがわせるのである。

(四) 主作物からみた農耕の特色

栽培村数にもとづいて各作物類型ごとに判定した主作物の構成によれば、近代の飛驒地方の農耕には、つぎのような特色ある二つの地域性が認められる。

まず、飛驒地方南部の益田郡では、穀類のコメ・オオムギ・ヒエと豆類のダイズ、工芸作物では茶と楮とが基幹作物となる。すでにくりかえし指摘したように、これらのうちコメとオオムギを除く各作物は焼畑作物の性格が濃い。しかも、飛驒地方にあつて根雪期間の比較的にみじかい益田郡では、オオムギはコメの裏作として栽培された可能性が高い。したがつて、近代の益田郡においては、常畑の展開が必ずしも十分ではなかつたと推定される。少なくともナタネやタバコなどの作物を受容し得るほどに十分な常畑が用意されていなかったと思われる。

これに對して、飛驒地方北部の大野・吉城両郡では、コメ・ヒエ・ダイズと荏・桑・

楮を主作物とし、これにナタネやアサ、タバコ、アイといった作物と、一部の地域では蔬菜類が加わる。そのうえ、これらの栽培村は必ずしも少なくはなく、益田郡にくらべると常畑作物の比重が著しく高い。したがって、近代の大野・吉城両郡では、焼畑的な性格の濃い作物と水田における水稻栽培に、さらに常畑作物が付加され、これらによって当時の栽培作物を構成していたのである。

四、サンプル村の作物結合とその特色

近代の飛驒地方に認められた農耕の特色をよりくわしく分析するために、三郡それぞれに三〇%の村落を単純ランダムサンプリング法によって抽出し、おのおのの村における作物結合を明らかにする。ついでその地理的な分布を検討する。抽出村落数は、大野郡四一村、吉城郡五四村、益田郡三〇村の計一二五村である。

(一) サンプル村の作物結合

穀類五作物（オオムギとコムギはムギ類に一括する）には、飛驒地方に一〇とおりの組合せが存在する。第九表によると、穀類の組合せが多様性にとむのは大野・吉城両郡においてであり、この両郡の作物結合の出現頻度は、五作物すべてをふくむ例がもっとも高い値を示す。これに対して、益田郡では作物結合の変異がきわめてとほしく、ヒエ・ムギ類・コムギ結合にサンプル村の七割強が集中している。このように、益田郡における穀類の組合せは他の二郡にくらべて著しく異なった特性を示す。

しかし、これが特定作物の脱落Ⅱ単作化への移行を示すのか、あるいは地形をふくめた環境に由来するのかは目下のところ明らかではない。

第9表 穀類の組合せ

組 合 せ	要 の 素 数	大 野	吉 城	益 田	全 郡
ヒエ・ムギ・コメ・ソバ・アワ	5	18	34	—	52
ヒエ・ムギ・コメ・ソバ	4	5	6	4	15
ヒエ・コメ・ムギ・アワ		5	3	—	8
ヒエ・ムギ・ソバ・アワ		3	2	—	5
ヒエ・コメ・ソバ・アワ		2	1	—	3
ヒエ・ムギ・コメ	3	5	7	22	34
ヒエ・ムギ・アワ		1	—	—	1
ヒエ・ムギ・ソバ		—	—	3	3
ヒエ・ソバ・アワ		2	—	1	3
ヒエ・ソバ	2	—	1	—	1
計		41	54	30	125

第10表 工芸作物の組合せ

郡別の組合せ数

	大 野	吉 城	益 田
栽培作物数	9	9	3
組合せ数	26	31	3

組合せの出現頻度

順位	大 野 郡	吉 城 郡	益 田 郡			
1	桑・麻・楮・タバコ	6 ナタネ・苳・楮	7 楮 14			
2	苳・桑・楮	4 ナタネ・苳・桑・麻・楮・タバコ	5 楮・茶 7			
3	ナタネ・桑・麻 苳・桑・麻・楮・タバコ	3 ナタネ・苳・アイ・桑 ・麻・楮・タバコ	3			
		3 ナタネ・苳・アイ・桑 ・麻・楮	3 — —			
		3 ナタネ・桑・麻・楮	3			
	そ の 他	24	そ の 他	30	そ の 他	—
	組 合 せ な し	1	組 合 せ な し	3	組 合 せ な し	9
計		41		54		30

ところで、穀類の組合せにみる作物数は、吉城郡の一例を除いてすべて三つ以上である。二作物結合の一例は吉城郡平湯村で、当時一四戸を数えたこの村は、「十四戸いづれも浴客の旅宿をなし、温泉の浴客、年々に増益で、米・麦・味噌・醬油・油・蠟燭・菓子等に至るまで、村家にて買入置て、浴客に商ふ」〔15〕湯治場という特異な性格をもっていた。したがってこれを除くと、当時の飛驒地方における人口のかなりの部分を支持するうえで、三つ以上の穀類の組合せが不可欠であったと考えられる。

穀類について栽培村の多い工芸作物のうち、第一表にかかげた仏供花を除く九作物の結合は、大野郡に二六とおり、吉城郡で三一とおりが存在する。三作物しか工芸作物をもたなかった益田郡の場合には、二とおりの組合せだけが認められた。これらの組合せのうち上位三とおりの出現頻度は第一〇表のとおりで、飛驒地方北部の二郡にはすでに指摘した新しい傾向が明確に示されている。

また、豆類については大野・吉城両郡にダイズ・アズキの組合せがみられ、益田郡にはダイズが欠落する。さらに蔬菜類の場合は、大野郡の蔬菜栽培村がサンプル村の二四%を占めることが注意される。

(二) 四作物類型の組合せ

穀類から工芸作物にいたるまで、主作物すべての作物結合をサンプル村全体について検討することは、ここではあまり意味がない。そのおもな理由は説明がきわめて複雑になることと、その結果として作物結合の特性を必ずしも明確に把握できないからである。そこで、これまで述べてきた主作物を、穀類(M)・豆類(B)・蔬菜類(G)・工芸作物(A)の四つの作物類型にまとめ、これら相互の組合せにもとづいて分析を加えることにする。

四作物類型の理論的に可能な一二とおりの組合せのうち、飛驒地方にはM・B型、M・B・A型、M・B・A・G

第11表 4 作物類型の組合せの頻度分布

組 合 せ	大	野	吉	城	益	田
M・B・A・G	18	0.44	3	0.06	6	0.20
M・B・A	23	0.56	47	0.87	15	0.50
M・B・G	—	—	1	0.02	—	—
M・B	—	—	1	0.02	9	0.30
M・A	—	—	2	0.04	—	—
計	41	1.0	54	1.0	30	1.0

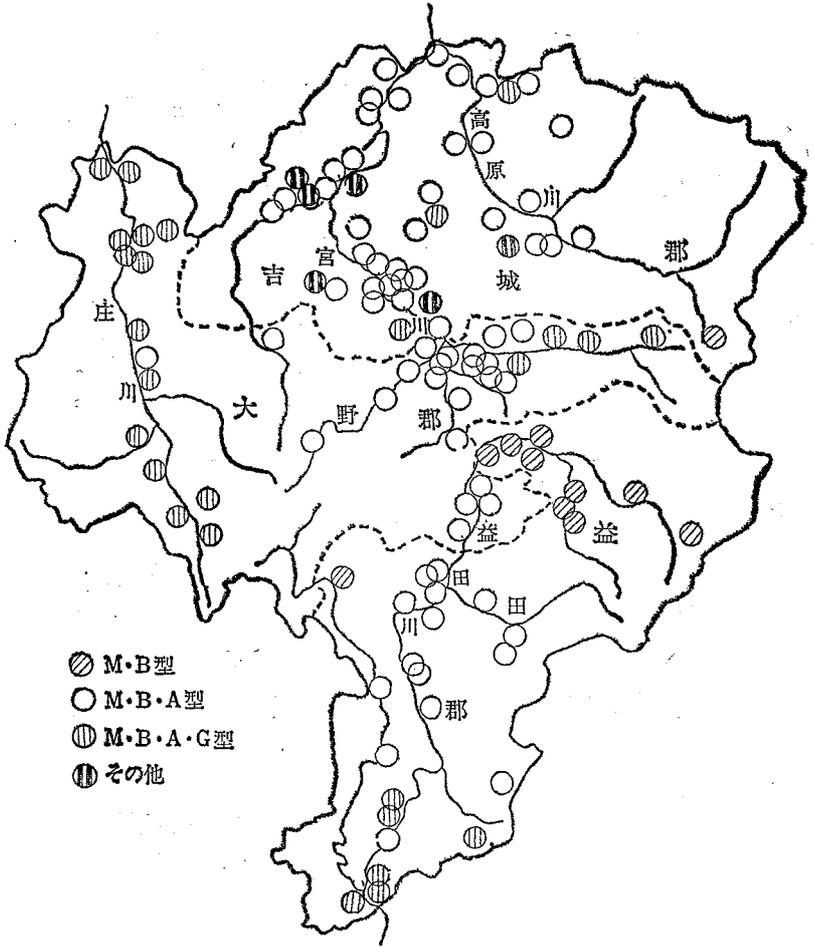
M：穀類 B：豆類 G：蔬菜類 A：工芸作物

0.56などの数値は、それぞれの組合せの対サンプル村比を示す。

型、M・B・G型とM・A型の五とおりがみられる。これら五つのタイプの作物結合の頻度分布は第一表のとおりで、M・B型、M・B・A型、M・B・A・G型が相対的に高い。この三タイプは、作物構成のうえからそれぞれつぎのように評価される。

まずM・B型は、コメもしくはヒユなどの穀類とダイズを主とする豆類との二作物類型の結合で、エネルギー源としてのデンプン質食糧に植物性タンパク質源が結合したものである。これは主食食糧の獲得のみを目的とした作物結合のタイプで、主食食糧にはなり得ない蔬菜類Gや工芸作物Aが欠落している。この意味でM・B型は、近代の飛驒地方におけるもっとも基本的な作物結合である。その出現頻度はサンプル一二五村のうち一〇例にとどまり、じつに九例が益田郡阿多野郷を中心とする益田（飛驒）川上流域（現在の阿多野郡朝日村・高根村）に分布する（第三図）、この地域は飛驒地方の縁辺部にあたり、そこに主食食糧の獲得のみを目的とするM・B型が集中する。

こうしたM・B型の特性と分布上の特色とは、このタイプがあとで述べるM・B・A型やM・B・A・G型に歴史的に先行したことを推定させる。つまり、M・B型は、工芸作物や蔬菜類が飛驒地方に導入され展開する以前の、相対的に古い作物結合が残存したものと考えられる。



第3図 サンプル村の作物結合

これに対して、M・B型に工芸作物Aが結合したM・B・A型は、飛騨地方の主要部にひろく分布し、その出現頻度も八五（六八%）ともっとも高い値を示している。したがってこのタイプは、近代の飛騨地方における標準的な作物結合と判定できる。このようなM・B・A型の成立と展開は、飛騨地方が天領であったことをさしひいてもなお、幕藩体制下における工芸作物

の奨励という当時の一般的な状況を考慮すれば容易に理解できるのである。

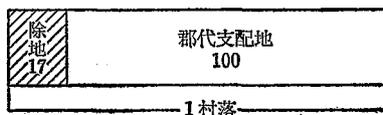
残るM・B・A・G型は、穀類と豆類の結合であるM・B型に主食糧にはなり得ない蔬菜類Gと工芸作物Aとが結びついたタイプで、飛驒地方におけるもつとも多様な作物類型の結合である。その出現頻度はサンプル村の二割強にすぎない。しかし、このタイプを示す村落は、二七例中のじつに五割をこえる一四例が庄川流域の諸村に集中的に分布するのである。こうしたM・B・A・G型の分布に認められる顕著な特色については、以下のように説明される。

(三) 蔬菜をともなう作物結合型の成立

近代の飛驒地方において、出現頻度の高い三つの作物結合型の地理的分布と頻度分布にみられる特性を相互にくらべると、つぎのような推定がなりたつであろう。

すなわち、益田川上流域に残存するM・B型の作物結合は、主食糧の獲得だけを目的に穀類と豆類を栽培する基本的なタイプで、これがかつての飛驒地方にひろく分布していたと仮定する。そこへ蔬菜類や工芸作物が導入されるにおよんで、各村落はこれら二つの作物類のいずれか、もしくは両方を選択しM・B型にむすびつけていった。その結果、蔬菜類や工芸作物をともなうM・B・A型とM・B・A・G型が成立した。しかも工芸作物Aは、幕藩体制下における栽培の奨励を背景に、飛驒地方のほとんどの村で選択されるにいたつたと推定される。

こうした推定は、第一一表にかかげたM・B・G型(一例)や、豆類の欠落がみられるものの穀類と工芸作物とが結合したM・A型(二例)をも説明している。なかでもM・A型は、作物結合の成立のプロセスにおいて生じた、きわめて例外的な変異として位置づけることが可能である。



第4図 郡代支配地と寺社領除地をもつ村の模式図

郡代支配地を100としたときの除地の割合は、『後風土記』と『旧高旧領取調帳 中部編』(16)との計算結果に一致をみた。

この推定が容認され得るとして、つぎには蔬菜類の選択はどのような状況のもとで成り立つかが問題になる。そこで、もう一度M・B・A・G型の分布をみると七割が大野郡に分布し、しかもそのうちの半数以上が庄川流域諸村に集中していた。この地域にはかつて照蓮寺が存在した荻町村が位置する(明治三年当時、照蓮寺はすでに高山町村にうつっていた)。そのうえ庄川流域では、同寺とその末寺をはじめとする寺社領除地をふくむ村が七〇%にもおよんでいる。これらの村は、第四図の模式図に示されるように、当然のことながら高山郡代支配地と寺社支配地とからなる。このうち、郡代支配地では一般の村と同じように工芸作物の栽培が奨励され、作物の選択のはばが相対的にせばめられていた。

しかし、寺社領は除地であるがゆえに、栽培作物の選択について郡代支配地ほど直接的な影響をうけなかった。そのため除地では郡代支配地とは別の農業のあり方を模索するゆとりがあり得たはずであり、その結果当時の飛驒地方に導入された作物のなかからよりベターなものとして、蔬菜類が積極的に選択されていったと考えられる。この蔬菜類は従来なかった換金作物としての可能性をもつ作物である。しかし、その選択はまったくランダムにおこなわれたわけではない。基本的には焼畑につらなる当時の飛驒地方の農耕を背景として、蔬菜類のなかでもまず根栽類が選択されたのである。

蔬菜類をとまなうM・B・G・A型の作物結合は、庄川流域諸村に卓越する。これは、寺社領除地と郡代支配地という支配体制のありようが、作物結合に反映された結果である。

第12表 作物結合型と寺社領除地

—大野郡—

結 合 型	除地あり	除地なし	計
M・B・A・G	11	7	18
M・B・A	7	16	23
計	18	23	41

$$\chi^2 = 6.809^*$$

この解釈がきわめて高い妥当性をもつことを証明するために、大野郡における蔬菜類をふくむM・B・A・G型と、蔬菜類をふくまないM・B・A型のそれぞれについて除地の有無を集計すると、第一二表が得られる。この表にもとづいて、二つの作物結合型における除地の有無をカイ二乗検定すると、1%というきわめて高い確率で有意差が求められる。したがって、高山郡代の直接的支配下におかれなかつた寺社領除地において、蔬菜類が選択されたとする解釈は、非常に高い妥当性をもって証明できるのである。

五、まとめ

近代の飛驒地方におけるサブシステンス・エコノミーとしての農耕の復元を、作物結合によって試みた結果、つぎの諸点が明らかである。

まず、主作物のうえで当時の飛驒地方は、多様な作物構成を示す大野・吉城両郡と、構成要素の比較的少ない益田郡との、大きな二つの地域差が認められる。ついで、主作物の結合型からは、M・B型、M・B・A型、M・B・A・G型というそれぞれに特色あるタイプが復元された。しかもこれら作物結合型の出現頻度と分布の特色とから、M・B型は相対的に古い作物結合型であり、当時もっとも標準的であったのは、工芸作物をともなうM・B・A型であることが明らかにされた。さらに、蔬菜類をふくむ作物結合であるM・B・A・G型の成立には、寺社領除地というこれまであまり注意されることのなかつた支配のありようが、非常に強くかわつ

ていたのである。

近代の飛驒地方における農耕は、以上のような特性をもったものとして復元される。しかし、寺社領除地においてはのみ蔬菜類が作物結合の要素として選択されたという解釈とその統計的な手法による証明とは、筆者の知るかぎり他に例がない。もとよりこの解釈は、個々の寺社領除地の実態を地方文書などによって検証することで成立したものではない。あくまで飛驒地方全体を視野に入れた解釈であることを強調したうえで、多くのかたがたの御批判をお願いする次第である。

謝辞

この報告を作製するにあたり、小山修三助教授と秋道智彌助手（国立民族学博物館）には日常的な討論のなかで有益なコメントをいただいた。またデータベースの検索等コンピュータに関しては杉田繁治助教授（同）に御指導をいただいた。さらに、守屋毅助教授の主催する国立民族学博物館の共同研究「日本における山村文化の伝統と変容」では、佐々木高明（国立民族学博物館）・千葉徳爾（明治大学）両先生をはじめとする共同研究員各位によって長時間にわたる討論をいただいた。記して各位に礼申します。

なお、本報告は、文部省科学研究費（課題「日本における山村文化の伝統と変容」代表者 守屋 毅）の研究成果の一部をなすものである。

附表『斐太後風土記』記載のおもな食用産物（魚貝類と鳥獣類を除く）

穀類…コメ、ヒエ、アワ、ソバ、オオムギ、コムギ、キビ、コキビ、トウモロコシ、カラビエ（シコクビエ）
イモ類…サトイモ、ジャガイモ、ヤマノイモ、ツクネイモ、コンニャクイモ、サツマイモ、イモ類、クズ、クズ粉、ワラビ粉など

豆類…ダイズ、アズキ、エンドウ、ササゲ

野菜類…カブラ、カボチャ、カラシナ、ニンジン、キウリ、ウリ、スイカ、ダイコン、ナス、ネギ、ゴボウ、ズイキ、夕顔、茎立菜、菜類、カブラナ、セリ、フキ、ワサビ、ユリ、タケノコ、オタネニンジン、ゴシユウニンジン、タケフニンジン、サシノ、ヤマアザミ、ヤマゴボウ、リョウブ、ワラビ、ホシワラビ、ゼンマイ、ホシゼンマイ、ウド、ショウガ、ミョウガ、ヨモギ、ホシヨモギ、シノタケノコ、オオアザミ、カタクリ、ヤマゴボウなど

種実類…エゴマ、ゴマ、ナタネ、カヤ、クリ、クルミ、ギンナン、トチ、ナラ、ヒヨビ、ハシバミ、ホシグリ、ツキグリなど
果実類…ウメ、コウメ、アンズ、カキ、コガキ、シブガキ、グミ、ナツメ、ナシ、スモモ、サモモ、モモ、リンゴ、アケビ、マルメロ、ユズ、ガワラグミ、ホホサケ、ヤマナシ、イワナシなど

きのこ類…イワタケ、シメジ、ハツタケ、ヒラタケ、ホシヒラタケ、マツタケ、ザツキノコ、キタケ、マイタケ、ホシマイタケ、キノコ、カワタケ、シイタケ、ロウジタケ、オイタケ

注

- (1) 千葉徳爾 (一九六六) 『民俗と地域形成』 風間書房
- (2) Sward, J.H., (一九五五) *The Theory of Cultur Change*. University of Illinois Press.
- (3) 松山利夫 (一九八〇) 『近代の飛騨地方における食糧生産と商品生産』 人文地理学会第一三五例会発表要旨『人文地理』三二卷三号
- (4) 松山利夫 (一九七九) 『明治初期の飛騨地方における堅果類の採集と農耕』 『国立民族学博物館研究報告』四卷一頁
- (5) 富田礼彦編 (一八七三) 『斐太後風土記』の刊本、大日本地誌体系刊行会編 (一九七七) 『斐太後風土記』 雄山閣
- (6) 桑谷正道 (一九七七) 『斐太後風土記について』 大日本地誌体系刊行会編 (一九七七) 『斐太後風土記』 雄山閣 三頁—一〇頁
- (7) 秋道智彌 (一九七九) 『明治初期・飛騨地方における生産魚類の分布論的研究』 『国立民族学博物館研究報告』 四卷二頁
- (8) 松山利夫 (一九七九) 前掲(4)

- (9) Weaver, J.C., (一九五四) Crop-combination Regions in Middle West. *Geographical Review*. Vol. 44
- (10) King, L.J. 著、奥野・西岡訳 (一九七三) 『地域の統計的分析』 大明堂 九—一〇頁
- (11) Henshall, J.D. and King, L.J., (一九六六) Some Structural Characteristics of Peasant Agriculture in Barbados. *Economic Geography*, Vol. 42
- (12) 長野県編 (一九三九) 『長野県町村誌 北信編』 一頁—八四〇頁
- (13) ここでいう栽培村は、コメ・ヒエなどの作物が「産物」の項に記載されている村落をいう。
- (14) 山内小佐衛門「飛州地方御尋答書」 小野武夫編 (一九二二) 『近世地方経済史料』 近世地方経済史料刊行会 一七九頁—二〇六頁
- (15) 前掲(5) 八七頁
- (16) 木村 礎校訂 (一九七七) 『旧高旧領取調帳 中部編』 近藤出版社 三三五—三三〇頁